

(第3回)

中  
2019

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で23ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

受験番号	
氏	名
	ふりがな



一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校の校庭に三十二人の子供がいた。入学して間もない一年二組の子供たちだ。春の明るい陽射しが降り注ぐ中、屋外活動用のボードを首から提げ、担任の渡辺孝代先生の話の聞いています。上下とも白っぽいジャージを着た渡辺先生は、サンバイザーの下から子供たちの顔を見まわした。

「春のしるしを見つけましょう」

いささか抽象的な提案だったにもかかわらず、はい、と子供たちは返事をした。友達とおしゃべりしたり、ふざけっこしたりしながら、<sup>①</sup>めいめい春のしるしを探している。もう五月に入っていたから、はつきりした春のしるしが存在するわけではないだろう。それでも、<sup>②</sup>子供たちの見つけてくるものなら、どんなものであってもそれをしるしと認めよう、と先生は思っていた。

校庭の隅に年じゅう生えている草をちぎって持ってきた子にも、土から這い出してきた何かの幼虫を捕まえた子にも、何も見つけられなくて校庭の砂を手のひらに握りしめてきた子にも、合格点を出そう。よく見つけられたね、とほめよう。初めてなんだから。先生は思った。小学校に上がって初めての春。あなたたち自身が春のしるしなんだよ。

渡辺先生はこれまでもたくさん一年生を受け持った。意気揚々と入学してきた一年生のうちの半分くらいの子が、夏休みになる頃にはすっかりしよげて自信をなくしてしまっているのを見てきた。真ん中にいたかっただのに隅っこに追いやられ、椅子から蹴落とされる子も何人もいた。先生はそういう子たちを少しでも励ましたいと思っていた。椅子から落とされた子は低めの椅子を用意して、隅っこに縮こまっている子は手を引いて真ん中近くまで連れて行ってやったりしたかった。

A

そう思いながら三十年近くが経ち、自分の子供が就職したり結婚したり、自身も体調を崩したり治ったり、いろんなことを経て先生の心もいつも真ん中にはいられなくなった。何度も真ん中へ戻ろうとするうちにバネが利きにくくなっている。だからこの頃は、何かを見落としてしまったとしても自分を責めないようにしている。見落としたふりをすることも、実はときたまある。

( I )、春になって新しい子供たちを、特に一年生を担当するのはやっぱり新鮮な気分だ。二列に並び、ものめずらしそうに校舎を抜け、中庭を通って、校庭へ向かう子供たち。校庭の広さ、鉄棒の数、砂場の位置。そういうものに慣れてくれればいい。そういう意図もあった。並んで歩く練習にもなる。春のしるしを探しにくいのは、<sup>③</sup>有意義な時間になるはずだった。はず、ではなくて、実際に有意義な時間だった。子供たちはさまざまな春のしるしを見つけて教室へ戻った。

ただ、戻ってみたら、ひとり足りなかった。

「きちんと手をつないで二列で歩きなさいといったはずです」

先生は叱った。足りない子と手をつなぐはずだった子は、それだけでべそをかいた。横山寧々<sup>よこやまねね</sup>という女の子だ。柏木くんは、といいかけて口を噤んだ。柏木くんは、耳が聞こえない。そういおうとしたのだ。ううん、ちがう。耳が聞こえないのとはちがう。言葉が通じないんだ。——怖かった。異質なものに自分だけが気づいた、自分だけが触れてしまった、他人と共有できない怖さだった。

「これからみんなで捜しにいきます。今度は必ず手をつないで、二列になって」

一年二組はもう一度二列に並んで校舎に出た。上履きから外ズックに履き替えるだけででんやわんやの子供たちを引き連れて、足りない子を捜すのは一騒動だ。それでも、子供たちだけで教室に置いていくのはまずい、と先生は考えた。とにかく同じ道筋をたどって校庭へ出て、そこにいなかったら応援を頼もう。

さて。足りなかった子はあつけなく見つかった。みんなで春のしるしを探していたあたりからそう離れていない場所に、小さな背中が見えた。先生はほっとした。横山寧々もほっとした。その他たくさんの子供たちは、特に何の感慨も抱かなかった。ただうららかな春の光を浴びてにぎやかに歩いていった。

どうして蟻の行列がこんなにおもしろいのか柏木温之にはわからなかった。おもしろいと自分が思っていることさえもよくはわかっていなかった。ただじっと眺めている。蟻が何匹も何匹もいてどんどん歩いている。く。

**B**

柏木さん、と強い声がした。彼はただ、強い声だと感じたただけだ。柏木さん、ともう一度声がして、その声もやっぱり彼の頭の上を通り過ぎていった。無視をしているのではない。ほんとうに彼の耳には届かないのだ。さん付で呼ばれることなどこれまでなかったから、よけい自分が呼ばれていることに気づきにくかったのかもしれない。ハル、と呼ばれるのが常だった。父や母にも、幼稚園時代の先生や友達にも。

柏木さん、と三度目に呼んだとき、先生の声は怒りを含んで語尾がつり上がった。彼はやはり自分が呼ばれていることには気がつかなかつたが、**(i)** ははっきりと不快を感じた。それでも、目はまだ蟻の行列を追っていた。先生は彼のすぐそばまで行って、耳元で、柏木さん、と呼んだ。そうして、地面にしゃがんだままじっと動かない彼の細い腕をつかんだ。

「返事をしなさい」

ゆっくりと顔を上げた彼の顔に悪びれた色はなかった。まだ **(4)** あどけない、少しの反省もない、どちらかといえば不満そうな顔。先生はなんとなく恐ろしくなって、語気を

**X**

「教室へ戻りますよ」

彼はまだ同じ姿勢のまま先生を見上げていた。聴覚の不自由な児童はいなかったはずだ、と渡辺先生は頭の中で確認していた。(Ⅱ) もしかするとこの子はほんとうに名前を呼ばれても聞こえていないのかもしれない。それほど彼の様子には邪氣じやまきがなかった。

「ハル」

「え」

先生がふりかえると、彼はもう一度、ハル、といった。右手の指で左胸につけられた自分の名札を差していた。温之のハル。そう伝えたかったのだが、先生にはちよつと届かなかつた。

「さあ、列に並んで。教室に戻ります」

先生は彼だけにでなく、クラスのみんなを見渡していった。

あるいはこの子は精神的な発達が少々遅れているのかしら、と先生は考えていた。そういう子に声を荒らげたりにするのは教師としてあるまじき行為だ。彼は膝ひざや手のひらについた砂を払おうともせず、ただ突つ立っていた。

「柏木くん、手つなご」

横山寧々が、<sup>⑤</sup>健気けんげに手を伸ばした。しかし、やはり彼は突つ立つたままだ。やがて授業が終わるチャイムが鳴り出した。

「柏木くん、手」

辛抱強く、横山寧々は彼に向かって自分の手を差し出し続けた。彼はその手をちらりと見て目を逸そらした。自分がかむべき手はこの手ではない。その〈ii〉を地面に落とすと、さつき先生が近づいてきたときに蹴蹴られて転うがった小石を迂回うかいするかたちに蟻のルートは変更されていた。

「柏木さん、横山さんと手をつないで。教室へ戻ります」

渡辺先生がいい、横山寧々はほんとうはつなぎたくない手を彼に伸ばし続け、事態にあきれた女子たちが彼に蔑さげすんだ目をやり、飽きてどうでもよくなった男子たちが校庭の土を蹴り、そして柏木温之はやっぱりその場に突っ立っているばかりだ。

彼は⑥業しゅうを煮やした渡辺先生に腕を取られ、無理やり横山寧々と手をつながされ、校舎の中へと引きずられるように連れていかれたのだった。

ひとつの教室に揃そろった新しい一年生たちの顔が、陽の光を水面みなもに反射させた小川のように晴れがましくちかちかと輝いている中で、ハルの瞳はすぐに玉が落ちてしまった線香花火のようだった。チチチと心許こころもとなく細い火花のしつぽを散らすだけの、生気のない、存在感のない、小さい子供だった。□C

ハルは何もしなかった。できなかった。やろうとしなかった。どのように思われても本人はかまわなかった。なにしろ彼の心はそこになかった。そこにも、ここにも、どこにもなかった。ハルの心は常にそのへんを漂たぐよっていて、たまにはカチツとピントが合ったときにだけ身体からだに返ってくる。そういうときのハルの目には光が宿り、いきいきと動き出す。しかしピントがいつ合うのか、どこに合うのか、本人にもぜんぜんわかっていなかった。

ハルは授業を聞かなかった。聞かなかったからといって、これと違ってすることもないので、連絡ノートや国語のノートに心に浮かぶものを描きとめていった。蟻ありだ。描き出すと止まらなかつた。蟻。次のページにも、また蟻。蟻の行列。実際にハルの目に映った蟻と、記憶にある蟻は相似しているのに、ノートに出現した蟻はずいぶん違った。違うということが自分でもわかって、ハルはもどかしかった。蟻のすばやい身のこなし、身体からだの軽さ、歩く速度、何事にも動じず前へ前へと進んで行く脚力。そういった美しいものをもっと正確に描きたかった。

そうだ、見て描けばいいんだ。ハルは立ち上がった。椅子がカランと鳴った。担任の先生は授業中に立ったハルを見て、**（iii）**をひそめた。

「トイレなら急いで行ってらっしゃい」

声をかけたが、ハルは返事をしなかった。先生のほうを見てもいない。ただノートと鉛筆を持って、教室を出ていくところだった。

「柏木さん」

男子にも女子にも苗字にさん付けして呼ぶことに決めている先生がハルを呼んだ。<sup>⑦</sup>ハルはふりむかなかった。

（中略）

蟻だ、と思った。あいつ、蟻の行列を見てたんだ。

柏木温之がしゃがみ込んでいた場所をひと目見て、あさのけんた浅野健太は瞬時に理解した。そして思い出した。昔。保育園時代。ネンゴ年少組の頃だったか。園庭で蟻の行列を見ていたら、みゆき美幸先生に笑われた。健太くん、カワイイね、蟻なんかそんなにおもしろい？ おもしろくねえよ、と健太は即座に答えた。動揺していた。蟻を見ると、笑われるのか。それなら隠さなくてはならない。蟻はおもしろかった。何時間でも見ていたかった。でも笑われるのはごめんだ。不思議なことに、蟻に興味などないように見せかけていたら、だんだんほんとうに興味がなくなってしまった。何時間でも見ていられた蟻は、一分も見ていればじゅうぶんだと思えるようになった。俺も大人になったな、と健太は思った。さばさばした気分だったが、<sup>⑧</sup>少しだけさびしかった。

あのとときの気持ちを、今はつきりと思いつている。あいつは今でも蟻を見ていられるのか。誰にも笑われなかったのか。いや、そんなことはないだろう。笑われても、動じなかった。それは、ものすごく強いつてことじゃないか。

足を棒きれのように突っ張らせていた柏木温之が、やがてどうでもよくなったみたいに力を抜いて校舎へと連れ戻されるのを、浅野健太は呆然と見た。ハル、と訴えていた。先生はあっさり無視したけれど、名札を差していたから、きつと自分の名前はハルだといいたかったんだろう。

塚谷亜佐美と手をつないで二列に並んで歩きながら、こんなことをしている場合じゃない、と思った。クラスにこんなに強いやつがいたなんて。それまでの健太は、保育園では走ればいつも一等だったし、背も高いほうから二番目だったし、女子にもモテた。小学校に上がっても楽勝だと思っていたのだ。 D

柏木温之。こいつは何者だ。

走るのが速いとか、身体が大きいとか、女子に人気があるとか、そんなことがぜんぶどうでもいいことのように思えた。なんだかわからないけどあいつはすごい。子供心にも怖れを抱いた。だいたい、先生のいうことは聞くものだという思い込みが、いかに固定観念に縛られた、<sup>⑨</sup>管理側にとつて都合のいいものだったかということも、もちろんそんな語彙はなかったけれども、健太は直観で悟った。

蟻か。すげえ。柏木温之、すげえや。

それなのに先生はそれを理解しようとしなかったばかりか、彼を叱った。理不尽である。 Y である。

これからの俺は、先生ではなく柏木温之のいうことを信じよう。柏木温之を大事にしよう。健太はそう決めた。自分がまた大人に近づいたような気がした。とりあえず塚谷亜佐美の手をそつと離し、<sup>⑩</sup>先生に引きずられていく柏木温之の細っこい背中をまぶしく見た。

次の瞬間、ふと、異様な気配を感じた。顔を上げて、健太は自分の目を疑った。校舎の上方で異変が起きていた。上空がピンクに染まっている。なんだろう、この空、この色。信じられないようなピンク。何かすごいことが起こりそうな予感がピンクに塗り込められていた。胸がどくどく鳴った。ふたたびつなごうと伸ばしてきた塚谷亜

佐美の手をふりほどき、友達の背中をかき分けて、柏木温之に追いついた。

「ハル、空」

後ろから声をかけると、先生に右手、横山寧々に左手をつながれて歩いてきたハルは、足を止め、そのままずっとすぐに顔を空へ向けた。三秒か、四秒。ちょうど同じ時間だけ健太も空を見上げていた。これから何かすごいことが起こる、と健太は確信した。健太が顔を戻したのと同時にハルが健太をふりむいて、にこっと笑った。ああ。健太にはわかった。これがしるしだ。ハルのしるしを、俺はちゃんと見つけた。

(宮下奈都『ふたつのしるし』)

問一

——部①「めいめい」、④「あどけない」、⑤「健気」、⑥「業を煮やした」の本文中での意味を次から選  
び、それぞれ記号で答えなさい。

①「めいめい」

- ア たびたび
- イ いろいろ
- ウ さまさま
- エ それぞれ

④「あどけない」

- ア 大人びた
- イ はかない
- ウ おさない
- エ かわいい

⑤「健気」

- ア 自信に満ちあふれたさま
- イ 静かにゆつくりしたさま
- ウ 堂々と元気いっぱいなさま
- エ 困難に立ち向かっていくさま

⑥ 「業を煮やした」

- ア 時間が足らずに焦ってせかせかする
- イ 一つひとつじっくりと考えて行動する
- ウ 物事が思うように運ばなくていらいらする
- エ 予想外なことがいろいろ起きてびっくりする

問二 — 部② 「子供たちの見つけてくるものなら、どんなものであってもそれをしるしと認めよう」とあるが、

先生がそのように思ったのは、先生が生徒たちをどのように思っていたからか。それがわかる部分を本文中から、一五字以上二十字以内で抜き出しなさい。

問三 本文には、次の二文が抜けています。この二文が入る箇所を、本文中の **A** ～ **D** の中から一つ選び、記号で答えなさい。

その様子を眺めていると、風に吹かれて舞い上がってしまいそうな胸の中の何かが、きちんと元の場所へ収まるような感じがした。このままずっと眺めていたかった。

問四 (Ⅰ) と (Ⅱ) には同じ接続詞が入るが、文中に入る適当な接続詞を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア でも    イ だから    ウ また    エ たとえば

問五 — 部③「有意義な時間になるはずだった」とあるが、実際にそうならなかったのはなぜか。その理由として、  
——部③「有意義な時間になるはずだった」とあるが、実際にそうならなかったのはなぜか。その理由として、  
してもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 春のしるしを探しに行った後に、全員がそろっていないから。

イ 手をつないで二列で歩く練習がきちんとできず、台無しになったから。

ウ 渡辺先生が期待していた春のしるしを、誰も見つけることができなかったから。

エ 入学したばかりの大変な時に、ベそをかく子どもが出て面倒なことになったから。

問六 〔i〕 〔ii〕 〔iii〕に入る適当な言葉は何か。次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 手    イ 足    ウ 目    エ まゆ    オ まぶた    カ 耳    キ 口

問七 

X
---

に入る言葉として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 早めた    イ 遅めた    ウ 弱めた    エ 高めた

問八 ――部⑦「ハルはふりむかなかった」とあるが、ハルがふりむかなかった理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ハルは「柏木さん」と呼び続ける先生に怒りを覚えて、何か言われても絶対に返事をしないと決めていたから。

イ ハルは蟻を見ることに頭がいっぱいになり、慣れない呼び方で自分が呼ばれていることに気がつかなくなったから。

ウ ハルはここで振り返ってしまうと、心に決めたことが揺らいでしまう気がして反応しないまま出ることにしたから。

エ ハルは耳に入ってこない授業に飽きてしまったので、トイレに行くふりをして遊びに行こうと決めたから。

問九 ――部⑧「少しだけさびしかった」とあるが、なぜか。その説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大好きであった蟻の行列に対して全く興味がなくなってしまった自分自身に、次に何か熱中できるものが見つけられるかどうか、不安な気持ちになっていたから。

イ 蟻の行列を楽しんでいる姿を笑われるのが嫌だったが、いつからか何かに夢中になっている他の子を笑ってしまうようになり、自分に対して許せない気持ちがあったから。

ウ 一気に大人っぽくなったことを自慢げに思っていたが、何にも興味を持たなくなってしまい、そんな自分に対して悲しい気持ちになっていたから。

エ 大好きな蟻の行列をじっくりと見てもっと見ていたかったが、周りの目を意識してしまう自分の弱さに気が付いて、自分自身に情けない気持ちがあったから。

問十 — 部⑨「管理側にとって都合のいいもの」とあるが、具体的に指している部分を本文から二十字で抜き出しなさい。

問十一 

Y
---

に入る言葉として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア がんばりや      イ わからずや      ウ うれしがりや      エ さみしがりや

問十二 — 部⑩「先生に引きずられていく柏木温之の細っこい背中をまぶしく見た」とあるが、健太の気持ちの説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いつまでも幼さが残るハルの姿をうらやましく思うと同時に、非難する目で見ている。

イ 自分勝手なハルの行動がおそろしく、こわがっている自分を隠そうとしている。

ウ 飾らずにそのままの感情を貫いているハルの姿が格好良く映り、憧れを抱いている。

エ 先生の言うことを全く聞こうとしないハルの姿に、驚きあきれている。

問十三 この文章を読み、特に最後の段落について生徒AとDが授業で感想を述べました。明らかに間違っ  
たことを述べている生徒が一人います。間違っただけを言うている生徒の記号を答えなさい。

生徒A 「『これから何かすごいことが起こる』というのは、ハルくんがまた、一人でどっかに行っちゃってしまい、想像もつかないような大きなトラブルが起きてすごく怒られるだろうと予測しているんだね。」

生徒B 「健太くんは本当によく見て、よく考えているよね。ハルくんのしるしを健太くんが見つけられてよかったよ。少し大人びたとらえ方もできる健太くんとなら、ハルくんは仲良くやっつけていけそうだね。」

生徒C 「ハルくんは蟻の行列やピンク色に染まった空に素直に感動できる子なんだね。ピンク色の空を見て、ワクワクしたのだろうな。それを教えてくれた健太くんはこつと笑顔で返したんだね。」

生徒D 「自然の美しさに心惹かれるハルくんはやっぱり素敵だよ。ハルのしるしは自然と出てきた笑顔を指していると思う。このクラスの生徒は色々な自分らしい春を見つけたんだね。」

二 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

ひとつの小さな  があるといい

明日に向かって

ノートの片隅に書きとめた時と所

そこで出会う古い友だちの新しい表情

ひとつの小さな予言があるといい

明日を信じて

テレヴィの画面に現れる雲の渦巻き

〈曇のち晴〉 天気予報の <sup>①</sup> つつましい口調

ひとつの小さな願いがあるといい

明日を想って

夜の間に支度する心 <sup>したく</sup> のときめき

もう耳に聞く風のささやき川のせせらぎ

ひとつの小さな夢があるといい

明日のために

② くらやみから湧いてくる未知の力が

私たちをまばゆい朝へと開いてくれる

だが明日は明日のままでは

いつまでもひとつの幻

明日は今日になつてこそ

生きることができる

ひとつのたしかな今日があるといい

明日に向かつて

歩き慣れた細道が地平へと続き

この今日のうちにすでに明日はひそんでいる

(谷川俊太郎「明日」)

問一 この詩の形式を、次から選び、記号で答えなさい。

ア 口語定型詩

イ 口語自由詩

ウ 文語定型詩

エ 文語自由詩

問二 X に入るもつとも適当な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 真実    イ 思い出    ウ 約束    エ 悲しみ

問三 この詩に用いられている表現上の特徴は何ですか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 物の様子を言葉で表現することで、作品の音数を整えながら、心地よいリズムを生み出している。  
イ 同じ意味の言葉や似た表現を反復させることで、作品の伝えたい内容を強調し、印象づけている。  
ウ 現実にはない大げさな表現を用いることで、作品の視点を限定しながら、一点に集中させている。  
エ あえて言葉の順序を変えて示すことで、驚きが生まれ、作品に生き生きとした動きを与えている。

問四 —部①「つつましい口調」とは、どのような「口調」のことですか。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 遠慮のない口調    イ ひかえめな口調  
ウ 重みのある口調    エ 落ち着いた口調

問五 — 部② 「くらやみから湧いてくる未知の力が／私たちをまばゆい朝へと開いてくれる」には、どのような意味が込められていますか。その説明としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア たとえ明日できることでも、今日やりとげられるように必死に努力することで、自分の夢をかなえられ  
るということ。

イ 先がまるで見えず、夢に対して不安を感じても、精一杯の力を発揮して明日と向き合っていくべきで  
あるということ。

ウ ただ待っていても、明日は自分たちに力を与えてくれるため、夢が実現するのをゆっくり待つべきで  
あるということ。

エ 明日に向かって歩んでいけば、今後生まれてくるまだ見えていない力が、自分たちを夢へと導いてく  
れるということ。

問六 この詩について、生徒A～Dが授業で感想を述べ合いました。明らかに内容が間違っているものを次から  
選び、記号で答えなさい。

生徒A この詩は六連からなっていて、第四連までは、言葉やリズムをそろえながら、さまざまな「ひとつ  
の小さな」ものをあげているね。

生徒B たしかにそうだね。第三連の「もう耳に聞く風のささやき川のせせらぎ」という表現には、明日の  
支度をしながら、昔の体験を思い出している姿が感じられるなあ。

生徒C　　そういえば、第五連・第六連では、「今日」と「明日」が対比されているね。

生徒D　　第六連で「この今日のうちにすでに明日はひそんでいる」と言っているのは、「明日」は「今日」に支えられているから、日々の努力を重ねることが、夢をかなえることにつながることを伝えているんだと思うなあ。

【三】 次の語句やことわざに関する問いに答えなさい。

問一 日本語では、同じ二字熟語でも、読み方によって意味が異なる場合があります。

たとえば、次の①の「大事」は「おおごと」、②の「大事」は「だいじ」と読み、異なる意味で用いられています。

- ①自分の失敗を隠していたら、大事になってしまった。
- ②この万年筆は、おじいちゃんが大事にしていたものだ。

これを参考にして、次のそれぞれの□□に共通して入る漢字二字を、後の□□内の漢字を用いて答えなさい。

【A】

- ①□□がある野球選手に会って、サインをもらった。
- ②この森はまったく□□がないから、ぞつとするなあ。

【B】

- ①みんなで□□に練習したため、演奏会で金賞がもらえた。
- ②あと□□経ったら、京都へ行く新幹線が出発しちゃうよ。

問二 次の [A]・[B] にふさわしい表現を、後から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は一度しか使えません。)

●しばらく会っていないうちに、子どもが [A] と育っていた。(元気に成長する様子)

●まちの中央に小川が [B] と流れ、その中を魚が泳いでいる。(軽やかに流れる様子)

- ア しんしん    イ さらさら    ウ おろおろ  
エ すくすく    オ そわそわ    カ いそいそ

問三 次のそれぞれの体験を、「ことわざ」で表現すると、どのようになりますか。もつともふさわしいものを、後の「ことわざ」の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は一度しか使えません。)

①下校後に、サッカーのクラブチームで練習し、他の日には、柔道も習ってがんばっていたが、どちらもあまり上達しなかった。

②去年の夏休みも、アイスを食べ過ぎてお腹をこわしたのに、また今年も食べ過ぎてしまい、部活の練習試合を休んでしまった。

③休みの日に、友だちと一緒に釣りに行ったが、一匹も釣れなかった。そのうえ乗ってきた自転車のかぎま  
でなくしてしまった。

④体育館が暖かくなるように、ストーブを置いてもらった。しかし、広い体育館に一つしかないため、ほと  
んど暖かくない。

⑤新しいクラブを作ってもらいたいと、学校に要望した。なかなか認めてもらえなかったが、だんだんと熱  
意が伝わって、最後には認めてもらえた。

〔いんわぎ〕

ア 二階から目薬

イ 喉元のどもと過ぎれば熱さを忘れる

ウ 百聞は一見にしかず

エ 弱り目にたたり目

オ 石の上にも三年

カ 二兎とを追う者は一兎とをも得ず

キ 能ある鷹は爪つめを隠す

ク 好きこそもの上手なれ

四 — 部のカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

- ① この川は淀川にゴウリュウしている。
- ② 息子に外国のドウワを読み聞かせる。
- ③ 非常時にソナえて食料を買い込んだ。
- ④ 本当のことを正直にハクジョウする。
- ⑤ 学校までの坂道は美しい桜ナミキだ。

五 — 部の漢字の読みを、それぞれ答えなさい。

- ① 折り紙を細工してものを作る。
- ② お月見に団子をおそなえた。
- ③ 出発の合図に汽笛を鳴らした。
- ④ バスの停留所で友達を待った。
- ⑤ いよいよ舞台の幕が上がった。

